第四講　演習問題(4)

次の甲・乙はそれぞれ、平安末〜鎌倉初期の歌人藤原隆信の家集（個人歌集）の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

甲

母にはべりし人、こころざしはかたみにおろかならずながら、中将成家、定家など、その妹たちもあまたうち続き出できて、後は我が身ひとつ父変はりたる身にて、いと心細ながら、それにつけても、いよいよこころざしは浅からず思ひ交はして過ぎはべりしに、心よりほかなることによりて、年の三とせまで[1]相向かふことも無かりしを、たまたま仲良くなりて、日ごろ月ごろの恨みも忘れて、あはれにかなしくのみ思ふほどに、その年のきさらぎのころ、はかなく見なしつるを、かかりけるものゆゑ、三とせまでいぶせくて過ぎにけるかなしさも、いよいよ限りなく、また、ありありてかく今はの時にも仲良くなりて、後のわざなど、本意のままに宮づかひつる親子の契りの深さも、ひとかたならずおぼえて、法性寺といふ所の山の奥に納むとて、泣く泣くおぼえける

三とせまで恋ひつつ見つる面影をあかでや苔の下に朽ちなむ

おのおの忌みに籠り合へる中に、少将定家、[2]この母のおぼえなりけるを、かの少将、ことわりも過ぎて思ひかなしみて、我が身ひとつのことになむはべりけるとて、いたう嘆き沈みて、ひとつうちなれど、文に書き続けて言ひ遣はしたるを見るにつけても、いとどかなしさまさりて、返りごとに書き添へはべりし

数ならぬ身にだにあまるかなしさは君をとふべき言の葉も無し

少将、これを見るに、いとどせきやる方無きことなど書きて

墨染めに同じたもとをやつしても我をやとへと[3]思ひ置きけむ

まことに誰よりも、さこそは思ひくづほれたまふらめと書きて、また、これより

やつれぬる袖にもなほやまさるらん[4]思ひ置きけむ色の深さは

かくて春も暮れぬれば、名残りさへ［5］尽き果てぬる心地して、卯月の一日、またかの少将のもとへ

[6]ことしこそ惜しまで春を過ぐしつれまさる別れに心くだけて

　二日は四十九日なりければ、返し

過ぎ果つる名残りこそげにかなしけれ昨日のながめ明日のほどなさ

乙

五条三位入道、昔はまことの親にもまさりて、こころざし浅からず頼みきこえりしを、やうやう年積りて後、母なども亡くなりはべりて、かの入道もやそぢに余り、我が身もまたむそぢに余りて後、世を遁れてはべりしに、いとあはれに、昔今のことなど懇（ねんご）ろに書き続けられて、せめてのこころざしのあまりに、歌に一句を添ふるよしなどはべりて

みどり児と思ひし[7]人も老いぬとて背く世を見るかなしさはゆめかうつつか

返し

ありて無き夢もうつつも誰にかくとはれまし[8]君が見る世に背かざりせば

この感涙尽きせず、抑へ難きあまりに、これより、返しの奥に書き添へはべりし

もろともにとはまし人も亡き後に君一人あはれかくるも夢かとぞ思ふ

返し

もろともにあらまし[9]人の亡き後のかなしさは夢路ばかりに逢ふを待ちつつ

（『藤原隆信朝臣集』による）

注

五条三位入道…藤原俊成のこと。隆信の母、美福門院加賀の再婚相手。成家、定家らは、俊成と加賀の間にできた子どもである。

問一　甲の傍線部1・2の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

1
イ　兄弟仲良くすることも無かったが、
ロ　自分から折れることも無かったが、
ハ　仲違いをしたわけでも無かったが、
ニ　親しく対面することも無かったが、

2
イ　この母にそっくりだったのだが、
ロ　この母に深く愛されていたのだが、
ハ　この母の評判を気にしていたのだが、
ニ　この母の記憶を深く留めていたのだが、

問二　甲の傍線部3・4「思ひ置きけむ」の主語は同じ人物である。それは誰か。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信　　ロ　加賀　　ハ　定家　　ニ　成家　　ホ　俊成

問三　甲の空欄 5 には、これ以前の部分に複数回用いられている三字以内の副詞が入る。最も適切な語をそのまま記せ。

問四　甲の傍線部6「ことしこそ惜しまで春を過ぐしつれ」と表現されたのはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　あくまでも今年だけが例外なのであって、春を惜しむ人情は変わらないものだったから。
ロ　今年こそは春が去り行くのを惜しく思うまいと心に決めており、その通りとなったから。
ハ　春の別れがいつになく惜しく思われるのは、今年が特別な年となったせいであったから。
ニ　行く春が惜しいわけでなく、ひどく悲しい事が起こったため、一層思いがつのったから。
ホ　春が終わるのを惜しむのが毎年の習慣であったが、今年はそれどころではなかったから。

問五　乙の傍線部7・9の「人」は、それぞれ誰を指すと考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信　　ロ　加賀　　ハ　成家　　ニ　定家　　ホ　俊成

7＝　　9＝

問六　乙の傍線部8「君が見る世」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信が生きた前世
ロ　俊成が生きる現世
ハ　隆信が生きる現世
ニ　俊成がおもむく来世
ホ　隆信がおもむく来世

問七　甲・乙の内容と合致する最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　隆信は母に対する愛情を強く抱いていたが、母が再婚したため不如意な人生を送った。
ロ　定家は母をめぐって隆信に嫉妬したが、母の死後に、ようやく和解することができた。
ハ　隆信にとっても定家にとっても母の死は大きな衝撃であり、その思いを通い合わせた。
ニ　老齢に達した俊成は、亡妻の子である隆信を見舞ったが、俊成は既にややぼけていた。
ホ　俊成と隆信は、同時に出家を遂げ、ひたすら極楽往生を願う信仰の日々を送っていた。

問八　甲と乙とでは、取り交わされる「和歌」の形式が異なっている。それはどのように異なっており、また、なぜ生じたと考えられるか、**四十字以上五十字以内**で記せ。冒頭を一字下げにする必要はない。なお、句読点や符号等も一字とし、それらが行頭行末にきても、必ず一つのマス目内に記すこと。また、末尾は必ず句点で閉じること。

第四講

〔模範解答〕

問一　1 ニ　2 ロ　**問二** ロ　**問三** いとど　**問四** ホ
問五　7 イ　9 ロ　**問六** ロ　**問七** ハ
問八　甲は通常の短歌形式で、乙は五音の句が一句多い。それは型に収まりきらない詠者の思いがあるからである。
（四十九字）

〔現代語訳〕

甲

（私〔＝藤原隆信の〕母でございました人〔＝美福門院加賀〕は、（親子の）愛情は互いにいい加減なものではないが、（母が俊成と再婚し）中将成家、定家など、その妹たちもたくさん続いて生まれて、後には我が身一人が父が異なる身の上であって、たいそう心細いながらも、それにしても、ますます愛情は浅くなく互いに思い交わして過ごしていましたが、思いもつかぬことによって、三年の間親しく対面することも無かったが、たまたま仲良くなって、長い年月の恨みも忘れて、しみじみと心がひかれるとばかり思っているうちに、その年の二月の頃、（母が）死去したことに出会い、こういうことになったために、三年の間不仲のまま過ぎてしまった悲しさも、いよいよ限りなく、（しかし）また、結局はこのように（母の）臨終の際にも仲良くなって、死後の法要など、本来の願い通りお仕えした親子の契りの深さも、並々ならずに思われて、法性寺というところの山の奥に（母の亡骸を）納めようとして、泣く泣く思った（歌）、

三とせまで…＝三年もの間、恋い慕いつつ（離れて）見ていた（母の）面影を飽くことなく覚えているのに、墓の下で朽ちてしまうのだろうか。

各自が喪に服している中に、少将定家は、この母に深く愛されていたのだが、この少将は、道理にもまして思い悲しんで、我

が身一つのことでございましたと言って、ひどく嘆き沈んで、同じ家の中であるが、文に書き続けてよこしてきたのを（私は）見るにつけても、ますます悲しさが募って、返事に書き添えました（歌）

数ならぬ…＝人数にも入らぬ私の身にさえあり余る母の死の悲しさのため、あなたを見舞う言葉もない。

少将は、この歌を見ると、ますます涙をせき止めるすべもないということなどを書いて

墨染めに…＝墨染の同じ喪服に身をやつしても、私を見舞っておくれと（亡き母は）思い残したのであろうか。

本当に誰よりも、（少将は）そのように悲しみに思いくずれていらっしゃることでしょうと（私は）書いて、また、こちらから

やつれぬる…＝やつれてしまった袖の色の深さにも勝っているだろう。（亡き母が）思い残した気持ちの深さは。

こうして春も暮れたので、春の名残までもますます尽き果てた心地がして、四月の一日に、またこの少将のもとへ

ことしこそ…＝（例年は春を惜しむのが習慣であったが）今年は（母の死去で）春を惜しむこともなく過ごしてしまった。

悲しさがまさる（母との）別れに心が砕けて。

二日は四十九日であったので、（少将からの）返歌、

過ぎ果つる…＝過ぎてしまった名残こそ実に悲しい。昨日の物思いや明日がすぐやってくるのを考えると。

乙

（母の再婚相手の）五条三位入道〔＝藤原俊成〕は、昔は実の親にも勝って、（歌への）志を深く頼み申し上げていたが、次第に年を重ねた後、母なども亡くなりまして、その入道も八十路を過ぎて後、私の身もまた六十路を過ぎた後、（私は）出家をしましたが、たいそうしみじみと、昔や今のことなどを（父俊成は）熱心に書き続けなさって、はなはだしく思いがあり余るために、歌に一句を添え加えることなどがございまして

みどり児と…＝愛しい子と思っていた人〔＝作者・隆信〕も年老いたと思って（いたら）、出家した姿を見る悲しさは、

夢なのか現なのか。

（私からの）返歌

ありて無き…＝生きていた人も亡き世になり、夢なのか現なのか、誰にこのように尋ねられただろうか。あなた〔＝俊成〕

が生きる現世で（私が）出家しなければ。

この感涙は尽きることなく、抑えがたいあまりに、こちらから、返歌の奥に書き添えました（歌）

もろともに…＝一緒に対面したい人〔＝母・加賀〕も亡くなった後に、あなた一人が私に哀れみをかけてくれるのも、夢かと思う。

（俊成からの）返歌

もろともに…＝一緒に生きてほしい人〔＝妻・作者の母・加賀〕が亡くなった後の悲しさよ。夢の中だけでも逢うことを待ち続けて。